

「地域との連携を深めるために」  
 ー人権教育と防災教育をとおしてー

山武市立睦岡小学校長 眞鍋 力

### 1 学校の規模及び地域環境

本校は児童数268名、家庭数210戸の中規模校である。

平成18年3月に三町一村が合併し、新制山武市が誕生した。その北部に位置し、畑作中心の農山村地帯である。しかし、近年、宅地開発が進み、農林業に従事する保護者の割合が激減しており、その多くが会社員である。

平成7年4月北分校が、山武北小学校として分離独立、平成10年4月山武西小学校創立により学区が狭められた。4km以上の遠距離通学児童は、若干名である。通学方法は、徒歩のほかにバス通学や、自転車通学を認めている。自転車による通学は3km以上の地区に住む5～6年生に限定している。

平成21年度に文部科学省学校支援地域本部事業モデル校の指定を受け、研究主題を「地域との連携を深めるために」と立てて、地域の方々から学習支援をいただいていた。この2年間、地域の教育力の活用と地域との連携を強化していくことで、地域の教育力を積極的に活用していくこともできるようになってきた。これまで作り上げてきたものを基盤とし、昨年度は地域と連携した防災教育に取り組んで来た。

### 2 取組のポイント

本校の防災教育は、2つの防災教育を中心に取り組んだ。

- ①地域住民を対象とした防災教育
- ②児童を対象とした防災教育、である。

### 3 取組の概要

実施時期	計 画 事 項	参加者
H23	○地区児童会	全校児童
4月	○避難訓練 (避難経路の確認)	全校児童
	○シューター訓練	5年生 51名
	○拡大地区児童会	全校児童 保護者
5月	○交通安全教室	全校児童
6月	○避難訓練 (不審者対応)	全校児童
	○引き渡し訓練	全校児童 保護者
	○心肺蘇生研修	睦岡小職員 山武北小職員
7月	○第1回防災講演会	保護者 地域住民
	○地区児童会	全校児童
	○校内消火栓訓練 研修	睦岡小職員
8月	○地域と連携した 合同防災訓練	全校児童 保護者
9月	○避難訓練	地域住民

## 【地域連携】 23年度指定校 ①山武市立睦岡小学校

11月	(地震対応)	全校児童
	○第1回	3～6年
12月	○第2回	1・2年
	校内授業研究会	学習センター
1月	○起震車体験	全校児童
	○防災教育授業公開	保護者
	○第2回防災講演会	地域住民

員や区長を集め2度の会議を開いたり、回覧板を使って呼びかけた。

当日、午前7時30分、防災無線により地域住民の方々が地区ごとに睦岡小学校に歩いて避難をしてきた。避難グッズを持参してくる方も大勢で、約500名程度が集まってきた。

その後、地域の方々は地区単位で決められた流れに沿って、ワークショップ方式の5箇所のブースをまわり防災体験をした。体験ワークショップは次のとおりである。

ブース1 非常食体験

ブース2 煙体験

ブース3 初期消火体験

ブース4 応急処置体験

ブース5 救出救護体験(防災ビデオ視聴)

当日は雨天のため、体育館にての体験活動となった。

また、8月の猛暑の中、実施ということもあり、熱中症対策としてウォータージャグを各所に用意し、給水対策をとり緊急時に備え万全を期した。また、お年寄り、体の不自由な方のために駐車場の用意もした。

### 4 本事業担当者委員会

	委員名	所属及び役職
1	鈴木 弘	東上総教育事務所 山武分室指導主事
2	高野 隆博	山武市教育委員会 学校教育課指導主事
3	平出 博男	山武市役所総務部 総務課副主幹
4	菅 正明	山武市役所総務部 総務課主任主事
5	實川 稔	睦岡小学校支援地域 本部実行委員長
6	加藤 初代	睦岡小学校支援地域 本部事務局長
7	秋葉 善男	睦岡小学校 PTA 会長
8	椎名 義明	睦岡小学校校長
9	鈴木 和男	睦岡小学校教頭
10	寺村 有二	睦岡小学校教務主任
11	宮崎 久紀	睦岡小学校安全教育 担当



[開会式の様子]

### 5 具体的な取組

(1) 「地域住民」を対象とした防災教育

①合同防災訓練〔8/27〕

これまで本地域では、防災訓練が行われていなかった。そのため、地域の方々に防災訓練を周知していただくために、民生委

【地域連携】 23年度指定校 ①山武市立睦岡小学校



[煙体験の様子]



[非常食体験の様子]



[救出避難訓練の様子]



[応急救護体験の様子]



[初期消火体験の様子]

(2)「児童」を対象とした防災教育

①防災学習

防災学習は全校で取り組み、研究主題を「災害に対し、的確に行動できる児童の育成～地域と共に取り組む防災学習をとおして～」として取り組んだ。

授業には必ず学習支援ボランティアか保護者ボランティアに協力していただいた。学習支援ボランティアとは、保護者・地域の方でその方の専門性を活かし、子どもたちに直接指導をしてくれる方をいう。保護者ボランティアとは、保護者の方で教師の補助をしてくれる方をいう。外部の方が授業に参加することで、子どもたちも新鮮な気持ちで授業に取り組むことができ、その方たちへの親しみやふれあいから地域への愛着を深めることもできた。

学習支援ボランティアは、防災に詳しい地域の方として、始めは消防署の方、市の防災係の方と狭い範囲であったが、学習を進めていく上で、耐震に詳しい保護者の方や東日本大震災で被災地にボランティアに行かれた方などへと広がっていった。

また、地域のことに詳しい地域支援ボランティアの方に相談し、学習支援ボランティアを捜していただいた。

防災学習を推進していく上で、発達段階に応じためあてを設定することは大きな課題となった。そこで「くろしお教育サミット」（高知県・和歌山県・静岡県・千葉県の取組）の防災学習ハンドブックに書かれている発達段階に応じた基本目標を参考に、低中高学年毎に防災教育の目標を立てた。

各学年、防災学習をどの教科・領域で扱えばよいのか難しい検討であった。教科・領域の特性を考慮しながら、防災学習を取り入れていった。

## ②日常実践

### ア 拡大地区児童会〔4/28〕

#### 【目的】

- 登校班のメンバーの確認をする。
- 地区の危険箇所を確認する。
- 引き渡しカードの素地を作る。

本校では、年度初めに登校班の確認と危険箇所の確認のため、保護者と共に地区児童会を行っていた。また、今回は保護者間のつながりを深め、「共助」の意識を高める場になった。災害時の「引き渡し」の際に、保護者間で児童を引き取ってもらえる方を依頼し合い、情報交換を行うよい機会となった。



イ 地震想定引き渡し訓練〔6/9〕

#### 【目的】

- 突発的に起こる地震に対する心構えとより安全な災害時行動の育成を図る。
- 災害時の保護者への引き渡し方法を確認する。

東日本大震災の後に、引き渡しの際のマニュアルのようなものがあつた方がよいという保護者の声から引き渡しの基準や方法がわかるマニュアルを作成して訓練に臨んだ。

訓練当日は市の協力を得て防災サイレンと防災無線を使用し、本番のような臨場感を生み出すことができた。また、PTA配信メールも使って保護者に連絡をした。

防災無線、PTA配信メールを使つての連絡は非常に有効であった。

災害時には保護者間のやり取りも厳しくなる。保護者以外の方に児童を引き渡した場合、後から来た保護者は自分の子どもがどこに行ったのかすぐにわからない。そのため掲示板を用意し、後から来た保護者が分かるようにしておくことがよいことがわかつた。

### ウ 地震想定避難訓練②〔9/2〕

#### 【目的】

- 児童・職員ともに、いつ起こるかわからない地震に備えて、避難を安全に行うことができる能力を身につけさせる。

〈教室での避難のしかた〉

- ◎防災頭巾は、揺れがおさまってからかぶる(素早くもぐる)
- ◎机の左右の脚を持つ
- ◎頭を窓から反対側に向ける

校内放送が使えない想定で、拡声器を職員室前に置き避難指示を出したが、全てのクラスには伝わらなかった。職員が各階毎に直接避難指示を伝えに行くことで、伝えることができた。

1次避難の際に机の脚をしっかり持つという〈教室での避難のしかた〉は、ほとんどの児童が達成できた。避難指示を職員が伝えに行くことで全てのクラスに伝えることはできたが、職員間の声での避難指示の連携は、うまくできなかった。一刻も早く避難しなければならない状況が考えられる災害時には伝達手段は複数あった方がよいので、より効果的な方法を検討していくことが必要となった。

エ 起震車体験〔12/19、20〕

【目的】

○起震車で強い揺れを体験することで、地震の恐ろしさや体の自由がきかないことがわかる。

○地震が起きた時の、安全な身の守り方について考え、行動のしかたがわかる。9月の避難訓練で学んだ〈教室での避難のしかた〉を応用する場となった。東日本大震災の山武市内の揺れ震度5強と最大震度7を体感した。大きな揺れでは体の自由がきかないことや机の脚をしっかり持つことの大切さを実感することができた。



〔起震車体験の様子〕

オ 地震想定避難訓練②〔2/15〕

【目的】

- 休み時間でも、各自が自分自身の安全を守り、的確な1次避難ができるようにする。
- 校内放送、近くの先生の指示をよく聞き、校庭への2次避難ができる。

〈地震が起きた時の約束〉

- ◎危険なものからかくれる、はなれる
- ◎頭を守る
- ◎姿勢を低くする

今回はどこにいても安全な避難ができるよう、昼休みに抜き打ちで地震想定避難訓練を行った。子どもたちはそれぞれの場所で1次避難をし、校内放送に従って校庭への2次避難を行った。1年間のまとめの訓練でもあり、事前に〈地震が起きた時の約束〉を合い言葉として確認していたため、1次避難、2次避難ともによくできた。

③防災教育講演会

ア 第1回防災教育講演会〔6/18〕

講師に千葉西高校・姉崎高校地域連絡アドバイザーの川端信正氏に来校いただき、「睦岡地区の防災ポイントは何か」ーいま何に備えるかその時無事に乗り切るにはーというテーマで御講演をいただいた。

イ 第2回防災教育講演会〔1/18〕

## 【地域連携】 23年度指定校 ①山武市立睦岡小学校

講師に東京大学地震研究所アウトリーチ室助教の大木聖子先生にご来校いただき、「これからの地震防災教育」というテーマで御講演をいただいた。

### ④防災教育授業公開〔1／18〕

ア 研究主題 「的確に行動できる児童の育成 ―地域と共に取り組む防災学習をとおして」

イ 研究のねらい

○発達段階に応じた自助・共助の方法を身につけ、いざという時に的確に行動できる児童を育てる。

○学校・家庭・地域が防災に対する知識を深め、それぞれが連携したよりよい防災への取り組みのあり方について、実践を通して明らかにする。

ウ 研究仮説

学校と家庭、地域が連携して自然災害について学ぶ機会を設ければ、自助・共助の考え方に対する意識が高まり、的確に行動できる児童が育つだろう

エ 学校教育目標から

本校では平成21年度より6年間を取り組み期間として「地域と共に歩む睦岡小学校」をテーマに、学校教育目標を「郷土に誇りと愛着をもった心豊かでたくましい児童の育成」と定めた。

○共に学び合う子

○健康で活動的な子

○思いやりのある子

以上の3つの児童像を目指し、日常実践を進めている。防災学習においても地域支援コーディネーターの協力により、教育活動のさまざまな場面で支援ボランティアの方に活躍していただき教育効果を高めていきたいと考えている。

オ 児童の実態から

本校では、毎年「お・か・し・も」を合い言葉に年間4回の避難訓練を行ってきた。しかし、児童の防災に対する意識は決して高いとはいえなかった。ただ、2011年の3・11の大震災を経験したことで児童の意識に変化が見られるようになったことも事実である。同じ山武市内の九十九里沿岸部では津波による被害を大きく受けた。津波により海岸沿いががれきの山になった光景を目の当たりにした児童もいた。

毎日のように起こった余震の度に、第1次避難で机の下に身を隠した。おかげで、現在では、揺れと同時にさっと身をかがめて机の下に潜ったり、素早く防災頭巾を被り静かに教師の指示を待ったりと以前とは比べものにならないほどしっかり行動できるようになった。

そこで、こうした児童の防災に対する意識の高まりを良い機会ととらえ各学年で次のような授業展開を行った。

カ 授業展開

	教科領域	単元名
1年	特別活動	「じしんにそなえよう」 ～行動と準備を学ぼう～
2年	生活科	「つたえたいね まもりたいね 町のたから」 ～あたたかいね 助け合う町～
3年	総合的な学習の時間	「ぐらっときたら ～通学路のきけんを調べよう～」
4年	総合的な学習の時間	「地震」 ～身を守ろう 備えよう～
5年	総合的な	「防災 DVD をつくろ

	学習の時間	う」 ～地震に備えたい、みんなを守りたい～
6年	総合的な学習の時間	「防災パンフレットを作ろう」～防災パネルディスカッションをしよう～
学習センター	生活単元	「地震がきても大丈夫」～お正月だよ あそ防災 まな防災～

## 6 成果と今後の課題

地域の方々から学習支援を受けたことは、子どもたちと保護者の防災意識を高める上で非常に効果的であった。また、「〇〇ちゃんのお父さんだ。」と、子どもたちは保護者や学習支援ボランティアの皆様への親しみを深めることとなり、地域への愛着をより一層深めることに結びついた。

1年間の研究をとおして得た成果と今後の課題は以下のとおりである。

### 【成果】

○合同防災訓練、防災教育講演会、授業公開から、児童・家庭・地域の防災意識が高まった。

○地域支援コーディネーターを中心にたくさんの方の地域人材を発掘することができた。

### 【課題】

○継続的な地域との防災体制の構築。

(合同防災訓練など)

○教科・領域の特性を生かした学習内容の再検討

